

最初は、そんな軽い気持ちだったのかもしれない。「創くんになら、大切にしてもらえるかな」「お試しで付き合ってみようかな」という、どこか他人事のような感覚。

だけど、恋人になった創くんは、私の浅はかな想像を絶するほどに私を「甘やかして」きた。

デートの荷物は絶対に持たせてくれないし、歩く時は必ず私を車道から遠ざけ、少しでも寒そうにしていれば自分の上着をさらりと着せてくれる。一人暮らしの私の部屋に来ては、プロ顔負けの手料理を振る舞い、私が「美味しい」と一言言うだけで、世界一幸せそうな顔をするのだ。

(こんなに甘やかされたら……私、本当にダメになっちゃう)

胸の奥がキュンと甘く痺れる。彼と過ごす時間が増えるたびに、私の「付き合ってみようかな」という軽い気持ちは、とつくに彼への底なしの「好き」という感情へと塗り替えられていた。

「葵? どうしたの、ぼーっとして。どこか体調悪い? 」

顔を覗き込まれる。息ができるほど近い距離。彼の琥珀色の瞳に、私のマヌケな顔がハッキリと映っていた。

「ううん……なんでもない。ただ、創くんって、すごく私を甘やかすなって思ってた」